

Title	V. L. Parrington再考
Author(s)	大井, 浩二
Citation	大阪外国語大学学報. 29 p.231-p.239
Issue Date	1973-02-28
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80474">https://hdl.handle.net/11094/80474</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# V.L. Parrington 再考

大 井 浩 二

## V.L. Parrington Reconsidered

Koji Oi

As a preliminary study of V.L. Parrington, this paper chiefly discusses his Introduction to *The Connecticut Wits* (1926) and shows that his judgment of the eighteenth-century poets is often distorted by his Jeffersonian orientation, as witness his treatment of Joel Barlow. It also stresses the regressive aspect of Parrington's Jeffersonianism, thus defining him as one of those American intellectuals who are haunted by the American myth of the garden.

現在のわが国で、V.L. Parrington の名前をもち出せば、いまさら Parrington でもあるまい、と一笑に付し去られるにちがいない。彼の主著 *Main Currents in American Thought* (1927—30) を読もうとするのは、よほど忍耐力が強いのか、学者にふさわしい余暇に恵まれた読者に限られているだろう。あの龐大な三巻本の文学史は、その量によってぼくらを圧倒するだけでない。それが現在受けている評価もまた、ぼくらの氣勢をそぐに十分である。Parrington はそれほどに「古い」文学史家と思われているのだ。

たしかに、この大著は1930年代のアメリカにおいては、非常な影響力をもっていた。出版当時から、その新鮮な解釈や大胆な結論を賞賛する声は高く、一時期にはアメリカ文学研究法を一変させたとも考えられていたらしい。Lionel Trilling によれば、1940年という時点において、Parrington はリベラルなアメリカ文学研究家の “standard and guide” になっていたものであり、*“Parrington formulated in a classic way the suppositions about our culture which are held by the American middle class so far as that class is at all liberal in its social thought and so far as it begins to understand that literature has anything to do with society.”*<sup>1</sup> と主張することもできたのである。さらに10年後の1950年においても、*The American Mind* の著者 H. S. Commager は Parrington の “great study of American thought” が彼の “inspiration” であって、Parrington の弟子であることを認めるにやぶさかでないと言え告白していた。<sup>2</sup>

1 Lionel Trilling, *The Liberal Imagination* (1950), p. 3.

2 H. S. Commager, *The American Mind* (1950), p. x.

ところが、ほかならぬ Trilling のまことに破壊的な批評文 (“Reality in America”) のせいもあり、Parrington の名声は1940年代にはいつてから、急激に衰えはじめる。Richard Hofstadter の “The most striking thing about the reputation of V. L. Parrington, as we think of it today, is its abrupt decline.” という言葉からも、そのへんの事情を理解することができるだろう。<sup>3</sup> その原因はどこにあったのか。Hofstadter は Parrington の書物が政治思想史でも純粋な文学史でもなかったことや、1930年代から40年代にかけての「新批評」の隆盛ぶりなどを挙げている。その他にもいくつかの原因が考えられるだろうが、「新批評」の方法が Parrington の方法に大きな打撃を加えたことは、多くの個人的な経験からも十分に理解できるのである。

多くが Parrington にはじめて接したのは、1950年代の半ばごろであったが、すでに彼の主張はまことに色あせた、古くさいものに感じられてならなかった。たとえば、彼は Hawthorne について、“He was forever dealing with shadows.” とか、“He was the extreme and finest expression of the refined alienation from reality that in the end palsied the creative mind of New England.” といった評言を下しているのだが、こういった Hawthorne の非現実性を主張する発言は、すでに “the Golden Age of Hawthorne Criticism” を現出させた「新批評家」たちのすぐれた研究を知っている多くには、まったくのナンセンスなたわ言にしか聞こえなかった。「新批評」のあざやかな分析のまえには、Parrington 流の Hawthorne 理解は、その経済決定論的な裏付けにもかかわらず、まことに印象批評的であり、いささかの説得力ももたなかったのである。

がしかし、その「新批評」が大きく後退した今日、あらためて Parrington の復権を要求する声がしだいに高くなりはじめているとしても不思議はない。この点について、Donald Pizer は “One of the most significant recent movements in the interpretation of American literature has been the revitalization of the critical method of V. L. Parrington.” と書いている。<sup>4</sup> Pizer によれば、Marius Bewley, Richard Chase, Leslie Fiedler, Leo Marx といったすぐれた研究家の仕事は、Parrington と同じように、アメリカの文学と思想における “main currents” を “synthesize” することにあつたと考えられる。“Also like Parrington, they posit initially a universal dialectic in American experience which accounts for the distinctively American quality of these patterns in our culture.” というのが、Pizer の観測であつたのだ。いずれにしても、Parrington 的方法が新しくクローズ・アップされる気運にあることは、まず否定できない事実であるといえるだろう。

このように、現在は Parrington に対する従来の評価が大きくゆれ動こうとしている時期と考えられる。多くがここで彼をとりあげようというのも、こうした現状を考慮にいれてのことであるのだが、多くとしては、Parrington をとらわれない目で、あらためて見なおす必要があるのではないか、ということを主張したい。といって、あの *Main Currents* 全巻を検討することは、

3 Richard Hofstadter, *The Progressive Historians* (1970, Vintage Books Ed.), p. 349.

4 Donald Pizer, *Realism and Naturalism in Nineteenth-Century American Literature* (1966), p. 132.

いまのぼくの手にあまる仕事である。本稿では、Parrington が *The Connecticut Wits* (1926) と題するアンソロジーに付けた序文を中心に考えることとしたい。

このアンソロジーは Harcourt, Brace から “American Authors Series” の一冊として出版されたものだが、その40頁におよぶ序文は、*Main Currents* の第一巻に大部分が再録されている。いや、Parrington の大著はすでに1917年には完成していて、いくつかの出版社から拒絶されたあげく、やっと1925年になって Harcourt, Brace が出版を引き受けたという事情があるので、<sup>5</sup> *The Connecticut Wits* の序文は *Main Currents* のごく一部を転用したものというのが正しいかもしれない。しかし、結果的にいえば、*Main Currents* よりも一年早く出版されたこの序文は、Parrington の主著のPRを兼ねる働きをしていたことになり、その意味からいうと、Parrington の方法や態度を端的に伝えている一文であるという見方も成り立つにちがいない。

さて、Connecticut Witsは18世紀のおわりごろに活躍した Yale 大学に関係の深い文人のグループで、Hartford Wits の名前でも知られている。その代表的なメンバーは John Trumbull, Timothy Dwight, Joel Barlow, Lemuel Hopkins, David Humphreys, Richard Alsop, Theodore Dwight などであった。こうした詩人たちは、Parrington にいわせれば、もはや一般に読まれることのない三流詩人ばかりであって、試験前夜の大学生を悩ますだけにすぎないのだが、これらの詩人にもまったく存在理由がないわけではない。たしかに、彼らの作品は “stilted and barren” であって、その抜きがたい偏見は “hopelessly old-fashioned” であるけれども、18世紀末のアメリカ、とりわけニュー・イングランドの情勢に光をあてるのに役立つと考えられる。つまるところ、“the high title of poets” に値しない Connecticut Wits を Parrington があえてとりあげるのは、彼らの作品がアメリカ史における重要な時期を考えるための “extraordinarily interesting documents” にふさわしいからにほかならない。このように、その序文の冒頭から、Parrington は Connecticut Wits の文学性を認めないことをはっきりさせているのだが、彼の関心が彼らの思想的、政治的、宗教的背景にあったことは、三分の一以上のスペースをその問題の解明に費していることから明らかである。Parrington によれば、Connecticut Wits は “New England Federalism” の “stalwart exemplars” にほかならないが、この “New England Federalism” とは “the political philosophy of the Puritan Yankee” であって、その原理は “the dogmas of Calvinism and the needs of mercantilism” に由来している。それは元来 “a reaction from agrarianism” であって、アメリカにおける “Jacobinism” や “the Democratic Societies” とはまっ向から対立している。結局のところ、Connecticut Wits の背景をなしているのが、“old prejudice and present interest” であり、“Calvinistic dogma and mercantile profits” にほかならないとすれば、Connecticut Wits 自身が “stalwart Federalists of the common New England school” であると結論せざるを得ない、と Parrington は書いている。

以上のように、Parrington は Connecticut Wits の思想的背景をなす “old-fashioned Federalism” や “the traditional spirit of New England” や “the primitive Calvinist-Yankee

5 Hofstadter, pp. 486—7.

World”や“Puritan-Yankee theory”などを詳しく論じた結果、Connecticut Wits を“New England Federalism”の“self-confessed exemplars”と断定しているのである。読者としては、詩人を Federalists に仕立てあげようとする、Parrington の執拗さに驚くと同時に、一体その必要性はどこにあるのか、と問わざるを得ないのだ。

ここで読者は、*Main Currents* における Parrington が、アメリカには二つの“antagonistic philosophies”が存在するというテーゼを打ち出していた事実を思い出さねばならない。彼によれば、その一つは“the humanitarian philosophy of the French school”で、これは“the agrarian leaders of America”によって受けいれられ、“Jeffersonian program”に吸収されている。いま一つは“the English philosophy of *laissez faire*”で、これは“the thinking of the mercantile, capitalistic America”を支配し、“Hamiltonian Federalist”という形をとった、と説明されている。Connecticut Wits が後者の哲学を信奉するグループであるというのが、Parrington の主張であったことは、あらためて指摘するまでもあるまい。だが、さらに重要なことは、彼が *Main Currents* におけるみずからの立場を説明して、“liberal rather than conservative, Jeffersonian rather than Federalistic”と語っている事実にはかならない。つまり、Connecticut Wits を“New England Federalism”の“self-confessed exemplars”と規定することによって、Parrington は絶好の攻撃目標、うってつけの仮想敵を用意することができたのである。Connecticut Wits を批判することは、そのまま Jeffersonian としての Parrington の姿勢を打ち出すことにつながっている。その意味からいっても、アンソロジー *The Connecticut Wits* を彼の主著におけるテーマと方法の、見事な縮刷版とみなすことが可能になってくるのだ。

当然のことながら、Connecticut Wits はただ一人の例外を別として、Parrington から痛烈な批判を受けることになる。たとえば、David Humphreys は“an usually likable man”であったことが強調されるだけで、その文学性は“scarcely notable”と一蹴されている。Lemuel Hopkins は“eccentric Doctor”であったという私生活のエピソードが紹介されるにとどまり、Richard Alsop にいたっては、まったくのアマチュアの文学者で、“an incorrigible imitator of late eighteenth century English modes”であったことが指摘されるばかりである。また、Theodore Dwight は“perhaps the most vehemently Federalist”であったためか、Parrington の目の敵とされることになり、デモクラシー嫌いのこの詩人は、“republicanism”の発展を宗教と道徳の退廃のせいにした張本人とされてしまっている。その結果、“Yet after all Theodore Dwight was not an important man in spite of his heritage of Edwards blood.”といった具合に、作品の価値と無関係な裁断を受けているのである。John Trumbull の場合には、彼がインテリとしての特性に恵まれ、“the requisite qualities of a man of letters”を備えていたという、Parrington としては珍らしく好意的な評言を下している。だが、この Trumbull もまた、“a rebellious soul”でなかったことが忘れずに指摘され、“a lovable man”であったかも知れないが、あまりにも“easy-going and indolent”であったため、結局は詩人として大成することができなかったという結論になっている。

こうみてくると、Connecticut Wits の人と作品を論じるにあたって、Parrington は Jeffersonian としての敵意と偏見をあらわにしているといえるのだが、こうした態度は Timothy Dwight に対する評言に露骨なまでにうかがわれるのである。

Timothy Dwight は Yale 大学の総長として知られ、Connecticut Wits を代表するとみなされる詩人だが、Parrington にいわせれば、Dwight の名声は賞賛者によって作られたものであり、彼は賞賛者が考えているほどに偉大ではなかった。Dwight は世間的な評価が高いにもかかわらず、“a real prophet” や “an authentic voice” などではなく、単なる “a sonorous echo” にすぎなかったのであり、“There was no sap of originality in him, no creative energy, but instead the sound of voices long silent, the chatter of a theology long since disintegrating, the authority of a hierarchy already falling into decay, the tongue in short of a dead past.” と手きびしく批判されている。

このように Parrington が Dwight を酷評するのは、彼がなによりもまず “Federalist” であり、“Hamiltonian” であったからにはほかならない。Parrington によると、この人物は知的な好奇心が皆無であって、いっさいの変化に背を向け、その目はひたすら過去にむかっているにすぎない。Dwight にとって、“infidelity” と “republicanism” は同義語的であって、彼こそは “a good hater of all Jacobins and a stout defender of the law and order for which he drew the plans and specifications,” つまりは “a stalwart Federalist” の烙印を押すにふさわしい人間なのである。こういった調子で、Dwight を政治的、思想的な立場から攻撃したあと、やおらその文学作品の検討に移るのだが、ここでもまた Parrington の批評は辛辣をきわめている。彼の判断するところでは、Dwight は14巻にもおよぶ作品を書いたにもかかわらず、そのなかに傑作と呼べるものは一作もない。所詮、それは “the occasional work of a man wanting humor, wit, playfulness, artistry, grace, lacking subtlety and suggestiveness, but a shrewd common sense, a great vigor, and a certain grandiose imagination” にすぎないとか、“His ready versification... runs like a water pipe with the faucet off.” といった評言がつづく。つまるところ、Dwight は “a great college president” として賞賛されたかもしれないが、“a grewt thinker” でも、“a steadfast friend of truth” でも、“a generous kindly soul” でもなく、彼が “a great writer” と見なされたことがあったなどということは、まさに “a fact to be wondered at” というのが、Parrington の結論であるのだ。ここにもまた、Jeffersonian としての Parrington の面目が躍如としているといえようか。

だが、こうした彼の「偏見」にあふれた態度は、Joel Barlow の取り扱いに一番明確になっていると思われる。Barlow は Connecticut Yankee として生まれ、早くから Connecticut Wits の一員として活躍していたのだが、1788年から1805年にかけて17年間ヨーロッパに滞在した結果、Parrington の言をかりれば、“the provincial Yankee” から “one of the most cosmopolitan Americans of his generation” へ、“a member of the Hartford Wits, ardent in defense of the traditional Connecticut order” から “a citizen of the world, outspoken in defense of the rights of man” へと、華麗なる変身をとげるにいたるのである。

たしかに、フランスにおける Barlow は、当時のヨーロッパの新しい思想を大胆に吸収し、偏狭なアメリカ的、あるいはニュー・イングランド的思考を脱却するにいたる。彼はパリだけでなく、ロンドンにも長期間滞在して、Joseph Priestley, Horne Tooke, Tom Paine などと交渉をもち、さらには Thomas Jefferson とも親交を結ぶようになる。彼はまさに “one of the free democratic thinkers swarming in every European capital” となるのである。だが、こうした Barlow の変身と行動が、Connecticut Wits の基準からすれば、まったく異端的であったことはいうまでもない。Parrington によれば、Barlow のおかしな罪は “an open break with the Calvinism and Federalism of the Connecticut oligarchy” であったと考えられる。Yale 大学の総長としての Timothy Dwight が “Calvinism” に頭を悩ましていたとすれば、Barlow は “social justice” の問題に腐心していたのであって、 “in that difference is measured the distance the latter had traveled in company with the French republicans.” という Parrington の結論もきわめて当然といわねばならない。

こうして、Parrington は Connecticut Wits のなかで Barlow にもっとも多くのページ数を費し、高い評価をあたえているのであるが、以上の説明からも明らかなように、彼は詩人としての Barlow の重要性にはなんの注意もはらっていない。それどころか、Barlow が “no innovator in polite literature” であり、単に “the bog of provincial poetry” に埋没しているにすぎないことが、はっきり指摘されている。つまり、あくまでも Barlow の強みは、彼が “a good French radical in economics and politics” であり、 “many Connecticut provincialisms” を脱していた点にあると考えられる。さらにいえば、Barlow は “Hamiltonian Federalist” でないという理由で、Parrington から高く評価されているのである。だが、あらためて指摘するまでもなく、ほかの Connecticut Wits の場合には、その政治的、宗教的信条の点から批判されるだけでなく、詩的な創造力の欠如という点からも攻撃されていた。したがって、Barlow の場合にかぎって、もっぱら “apostle of humanitarianism” であり、 “apostate from Calvinistic Federalism” であるという点が強調されるのは、まことに身勝手な批評態度といわねばなるまい。Barlow の詩人としての弱点に目を閉ざした上で、 “so honest a thinker” としての彼が果たした “republican America” への貢献を無視してはならない、と Parrington が主張するのは、どう考えてもひいきのひき倒しといった印象をまぬがれないのである。すくなくとも読者としては、Barlow を “certainly the most interesting and original of the Connecticut Wits” にもちあげようとする Parrington の言葉のうらに、Jeffersonian としての彼の「偏見」がはたらいっている事実を見落としてはならないのである。

この Barlow に対する Parrington の偏愛ぶりは、*Main Currents* におけるこの詩人の位置づけを見れば、さらに明確になってくる。Parrington は第一巻のおわり近くに “The War of Belles Lettres” と題する一章を設け、彼のいう “a civil war of belles lettres” を “the Federalist Group” と “the French Group” の対立という形で示している。この “the Federalist Group” の主体をなすのが、Connecticut Wits であることは当然であるとして、ここでの Parrington は、彼らに対する敵意を序文の場合よりも、さらにむき出しにしているといってもよ

い。彼によれば、“The Wits were not devoid of cleverness, but they were wanting in ideas. They were partisans rather than intellectuals.”というほかはなく、結論的にいえば、“the Wits chose to remain too ignorant to be interesting.”と書いている。

このように Connecticut Wits を酷評したあと、Parrington は “the French Group,” つまり “the more stimulating company of the French partisans” の説明に移り、このグループの特色は “intellectual sincerity” であって、そのメンバーは “intellectual giants” ではないにしても、“the best intelligence then being devoted to literature in America” を代表するばかりでなく、その業績は “a suggestiveness today far beyond that of the Hartford Wits” をもっている、と書いている。そして、その有力なメンバーとして挙げられているのが、Philip Freneau, H. H. Brackenridge, それに Joel Barlow の三名であるのだ。つまり、本来は Connecticut Wits の一員であるはずの Barlow が、Jacobin としてまったく反対の陣営の一員として登場することになっているのである。もちろん、こうした成り行きは、すでに序文における Barlow の取り扱いから想像できないことではないのだが、それにしても、いささか強引にすぎるという非難をまぬがれることはできないだろう。さすがの Parrington もこの点を意識したとみえ、Barlow が “certainly the most interesting and original of the Connecticut Wits” であるという序文の表現を、*Main Currents* では “certainly the most stimulating and original of the literary group that foregathered in Hartford” と書きあらためて、Barlow が元来は Connecticut Wits の一員であったという印象を打ち消そうとしている。だが、こうした Barlow に対する態度には、Parrington 的偏見がはっきり露呈しているといわねばなるまい。

こうしてみると、Parrington が *The Connecticut Wits* を編集したのは（そして、究極的には *Main Currents* を書いたのは）、彼の Jefferson 的な理想を主張するためであったといえそうである。彼の関心は、彼自身くりかえし強調しているように、文学的評価にあったのではなく、あくまでも Jeffersonianism の復活という、広い意味の政治的色彩を帯びたものであったと断定できるのだが、なぜ彼はそのような Jefferson 的な立場を強く打ち出す必要があったのか。いや、一体、Jeffersonianism とはなにを意味しているのか。

それは、すでに引用した Parrington 自身の定義にもあったように、“the humanitarian philosophy of the French enlightenment” であり、“the conception of human perfectibility” に基づいている。その目的は、やはり Parrington の言葉をかりれば、“an equalitarian democracy in which the political state should function as the servant to the common well-being” ということになる。だが、こうした理想を Jefferson が抱くにいたった背景に、アメリカがヨーロッパとは異った、文明に毒されぬ、自然のままの世界であるという考えがあったことを見落としてはならない。このことは、Jefferson の第一回大統領就任演説におけるつぎの一節を読むだけで明らかになるだろう――

Kindly separated by nature and a wide ocean from the exterminating havoc of one quarter of the globe; too high-minded to endure the degradations of the others; possessing a chosen country, with room enough for our descendants to the thousandth and thou-



sandth generation;... enlightened by a benign religion, professed, indeed, and practiced in various forms, yet all of them inculcating honesty, truth, temperance, gratitude, and the love of man; acknowledging and adoring an overruling Providence, which by all its dispensations proves that it delights in the happiness of man here and his greater happiness hereafter —with all these blessings, what more is necessary to make us a happy and prosperous people?

また、Jefferson の理想が自然な状態で平和な生活を営むことにあったことは、彼の *Notes on the State of Virginia* (1781—82年に執筆) における “Those who labour in the earth are the chosen people of God, if ever he had chosen people, whose breasts he has made his peculiar deposit for substantial and genuine virtue.” といった一文からも察することができるにちがいない。しばしば指摘されるように、いわゆる Jeffersonianism の根底にあったのは、アメリカをエデン的な新世界、地上のパラダイスとみる、まことに牧歌的な理想にほかならなかった。さらにいえば、それは H. N. Smith のいわゆる “the Myth of the Garden”<sup>6</sup> であったのだ。

だが、こうした Jefferson 的理想が、1920年代も半ばを迎えた文明国アメリカにおいて実現不可能であることは、あらためて論じ立てるまでもあるまい。Parrington が *The Connecticut Wits* や *Main Currents* のなかで、Jeffersonianism の復活を唱えたのは、まさに時代の流れにさからう試みであった。もちろん、彼の理想とする Jeffersonianism が危機に瀕しているからこそ、はじめから時代錯誤的な努力であることを知りながら、あえて Jefferson 的立場を貫ぬこうとしたのだ、という見方も成り立つだろう。いずれにしても、Jefferson 的な世界の実現を希求する Parrington の声は、“a despairing voice from the wilderness” であったという D. W. Noble の発言<sup>7</sup> の正しさを認めるほかはないのである。Parrington は *Connecticut Wits* について、“They... piously dreamed of a future America as like the past as one generation of oysters is like another.” と書いていたが、主語の They を He にかえれば、そのまま Parrington 自身にもあてはまる評言であるといえよう。

あえて Jeffersonian を自認する Parrington の反時代的なポーズは、彼と同時代のアメリカ作家が Jeffersonianism やその背景にある “the myth of the garden” に対して示した態度と考えあわせることで、さらに一層はっきりしてくる。たとえば、*The Connecticut Wits* の発表される前年には、F. Scott Fitzgerald の *The Great Gatsby* (1925) が出版されているのだが、ここに描かれているのは Jefferson 的なアメリカの夢の崩壊であった。この作品の中西部人 Nick Carraway はきわめて牧歌的な夢を追い求めながらも、同時にまた、それが現実世界においては見えてぬ夢であることを知っている。Leo Marx 流にいえば、“the reality of history”<sup>8</sup>

6 H. N. Smith, *Virgin Land: The American West as Symbol and Myth* (1950) 参照。

7 D. W. Noble, *Historians Against History* (1965), p. 99.

8 Leo Marx, *The Machine in the Garden: Technology and the Pastoral Ideal in America* (1964), p. 363.

を認識しているのである。だが、あくまでも18世紀の Jefferson に帰ろうとする中西部人 Parrington は、作中のいま一人の中西部人である Gatsby と同じように、“the green light”を、“the orgiastic future that year by year recedes before us”を信じつづけていたのだ。Gatsby とともに、“beat on, boats against the current, borne back ceaselessly into the past”という表現であらわされる行動をとりつづけたのである。この Fitzgerald について、Parrington がつぎのようなメモを残しているのは、まことにアイロニカルといわねばなるまい——

F. Scott Fitzgerald

*This Side of Paradise* (1921); *The Beautiful and the Damned* (1922). A bad boy who loves to smash things to show how naughty he is; a bright boy who loves to say smart things to show how clever he is. Precocious, ignorant—a short candle already burnt out.

D. W. Noble によると、Parrington のように18世紀的な Jeffersonianism を追求するのは、George Bancroft 以来のアメリカ歴史家に共通にみられる特徴であり、こうした歴史家たちを Noble は “Historians Against History” と呼んでいた。<sup>9</sup> Parrington をその一人に数えあげることには異存はないのだが、ぼくとしてはむしろ、アメリカの知識人のなかに、アメリカをエデン的な世界とみなす Jefferson 的衝動がいつまでも強く残存している事実のほうに読者の注意をうながしたい。このことは、たとえば H.M. Jones の *Jeffersonianism and the American Novel* (1966) を一読することで、一層はっきりするのではないか。Jones は *America and French Culture* (1927) や *O Strange New World* (1964) などで知られる学者なのだが、上記の小冊子において、“the Jeffersonian belief in man” が “the basic belief of the Americans” であることをくりかえし主張し、“the Jeffersonian theory” に興味を示すことをやめた現代小説を徹底的に非難攻撃しているのである。ちょうど40年をへだてた Jones と Parrington の主張の一致は、単なる偶然によるものであるだろうか。

ともあれ、V. L. Parrington におけるアメリカ人の研究というテーマは、今後のぼくらにとって、まことに興味深い問題を提供しているといわねばなるまい。アメリカ人としての矛盾にみちた彼に、ぼくは強い関心を抱かざるを得ないのである。

9 Noble, *Historians Against History* は George Bancroft, F. J. Turner, Charles A. Beard, Carl Becker, V. L. Parrington, Daniel Boorstin を論じている。